

〈自分〉を見つめ、他者を見つめる文学、 子どもの思いをすくいあげる作品

原田留美

排除されない子どもの本音

「最近の幼年文学について」というテーマを受け、まずはもう一度読まなければと作品を集め始めたとき、幼年文学の定義の曖昧さを改めて実感することとなった。幼年文学なのか絵本なのか、判別しにくい形態のものがあつたからだ。けれども、やはり幼年文学は絵本とは別物だと思う。近年刊行された幼年文学作品のいくつかに沿って、そのあたりも意識しつつ少し述べてみたい。

たとえば、『セロリマン♪さんじょうでやんす』（吉田純子作 土屋富士夫絵 岩崎書店）。子どもが苦手としやすい野菜を登場人物にした点が共通しているので、食育絵本として知られる「ピーマンマン」シリーズ（さくらともこ作 中村景児絵 岩崎書店）が思い浮かぶが、こちらのヒーローは、子どもの役に立つ正義の味方を自称するものの地面すれすれをスロースピードでしか飛ばず、打てるピー

ムもへんてこで頼りないことこの上ない。〈ぼく〉に、セロリなんか食べない！と言い切られて、「あ、いや、いいんでやんす。セロリ、たべてくれなくても……。それより、あっし、せいぎのみかただから、子どものみなさんのおやくにたてれば。」と気弱に答えつつも、セロリを食べべて欲しさがありあり。けれども、その頼りなさが、〈ぼく〉たちの秘密基地を守ることに一役買うことになる。らしくないヒーローの逆転の物語。ただし、登場する子どもたちは最後までセロリは苦手なまま。子どもの本音が排除されていないあたりに、絵本とは違った魅力がある。

『レッツがおつかい』（ひこ・田中作 ヨシタケシンスケ絵 そうえん社）は、題名から『はじめてのおつかい』（筒井頼子作 林明子絵 福音館書店）を連想し易いが、五歳の男の子が自分の意思でお使いに行く話。お金も持たずに一人で電車に乗り、ショッピングモールへ。途中何回もおとなたちから「おかあさんは、どこ？」と尋ねられるけれど、おとなの思い込みや常識にうまく乗って深く追求されることもない。おとな社会に対するレッツのクールなまなざしや分析に、随所でにやりとさせられる。主人公は五歳児だが、この作品の面白みがわかるのは、子どもとおとなの関係を一歩引いて見ることができる段階になってからだろう。おとなは子どものことをわかったつもりでいるけれど、子どもからすればおとなは実に不思議な存在なの